

## *The Great Gatsby*における自己信頼 (Self-Reliance)

福 屋 利 信

### 〔抄録〕

本稿は、アメリカの思想家 Emerson が掲げた自己信頼という概念の継承を、*The Great Gatsby* (by F. Scott Fitzgerald, 1925) の主人公 Jay Gatsby の常識を超越した行動のなかに見出し、その共通する部分を明確にすることから論をはじめ。次に、Gatsby が自己信頼を拠所に行動したことの必然性を追求し、最終的には、Gatsby の自己信頼が崩壊せざるを得なかった理由の究明を目的とする。

なお、論を展開していくうえで、産業革命とフロンティアがもたらす富の蓄積を背景にロマンティックな夢を描き得た1830年代の Emerson の自己信頼と、そのロマンティックな夢が幻想と化しつつあった1920年代の Gatsby の自己信頼との対比という、歴史的視点を本稿の中心におく。

キーワード 自己信頼, 社会からの自己の遊離, 1920年代— 現実からの遊離

### はじめに

アメリカン・ロマンティズムを代表する Ralph Waldo Emerson の超越思想 (Transcendentalism) を支える大きな柱の一つに、自己信頼 (Self-Reliance) という概念がある。それは、神を人間の手の届かない超然とした存在として捉えるのではなく、我々人間ひとりひとりのなかにも神性は存在するとし、自己すなわち個の能力を最大限に信頼するロマンティックな概念である。そこからは、ヨーロッパ文化の呪縛から解き放たれ、アメリカ独自の思想体系を創造していこうとする Emerson の気概と野心が伝わってくる。<sup>(1)</sup> Emerson の思想が、Thoreau, Whitman に代表される後進のアメリカン・ロマンティズムを支えた作家たちに少なからず影響を与えてきたのも、こうした彼のナショナリズムのほとぼしりゆえといえるかもしれない。個人の無限なる可能性を説く Emerson の超越思想は、時代を越えた普遍性を持ち、飽く

なき上昇を求めるアメリカ人の基本理念の底に、いまでも脈々と生き続けているアメリカ的概念といえよう。

## 1. Emerson の自己信頼

Gatsby の行動を Emerson の自己信頼と比較しながら論じていくという本稿の性格上、まず Emerson の自己信頼の中心概念を明確にしておく。Emerson は 'Self-Reliance' (1841) のなかで次のように述べている。

[T]he only right is what is after my constitution; the only wrong what is against it. A man is to carry himself in the presence of all opposition as if every thing were titular and ephemeral but he.<sup>(2)</sup>

「自己の性質に従っていることのみが正しく、そうでないものは間違っており、人間はどんな反対にあっても、自分以外のものはすべて有名無実の儚いものであるかのように行動するべきだ」という考え方は、Emerson の思想体系を根底で力強く支えている。また、1840年4月7日付の彼の日記では、「わたしはすべての講演を通じて、ただ一つのことを、すなわち個人は無限だという教義を教えてきた<sup>(3)</sup>」としている。唯一正しいものが個であり、それが無限だとする Emerson の自己信頼は、個は神の意志には逆らえない有限なものとするカルヴァニズムや自然主義的決定論とは真向から対立するものであり、個が神性を内包しているということに他なるまい。しかし、一方で、社会と関係をもたなければ生きていけない人間の宿命を十分認識していた Emerson は、無限なる個とその個が生活する場である集団 [= 社会] との均衡という視点も提示している。

It is easy in the world to live after the world's opinion; it is easy in solitude to live after our own; but the great man is he who in the midst of the crowd keeps with perfect sweetness the independence of solitude.<sup>(4)</sup>

自己信頼を実社会で実現していくには、「社会から遊離することなく個を温和な態度で保ち続けることが必要だ」と Emerson は主張する。従って、一般的に唯心論として理解されている Emerson の自己信頼という概念は、実は、実用主義哲学 (pragmatism)<sup>(5)</sup> 的視点をあわせもつことで完成されているといえるのである。

また、Emerson が自己信頼をおおらかに主張できたのは、彼が生きた時代と無関係では有り得ないであろう。Emerson が自己信頼の思想をほぼ確立した1830年代は、産業革命と広大肥沃

な大地で繰り広げられるフロンティアの「西漸運動」がもたらす富の蓄積によって、アメリカとアメリカ人が自分たちの未来にロマンティックな夢を抱き得た時代であった。加えてフロンティアは、東部の搾取され続ける不満分子にその不満の捌け口を与えるかたちで社会の安全弁的機能を果たした。つまり、いつの時代にもつきものの社会矛盾は、ひとまず表面化することを免れていたのである。<sup>(6)</sup>すべてが上限のない右かたあがりの上昇線を描いていた時代から生まれた自信に満ちた精神風土が、Emersonの個を極限まで信じるというロマンティズムの背景になっていたと考えて間違いあるまい。

## 2. Gatsbyの自己信頼

GatsbyがEmersonの自己信頼に通じる精神を宿していたことを証明するために、自己の直観を信頼し、ことさら自己を主張したGatsbyの言動を、作品のなかから拾い上げてみる。昔の恋人Daisyに象徴される「過去」を取り戻そうとして、時間の流れという物理的に抵抗不可能な力に一人で立ち向かったのがGatsbyである。次の語り手Nick CarrawayとGatsbyの会話には、その常識を超越した行為を可能にしたGatsbyの時間観<sup>(7)</sup>が象徴的に描かれている。

“I wouldn't ask too much of her [Daisy],” I ventured. “You can't repeat the past.”

“Can't repeat the past?” he [Gatsby] cried incredulously. “Why of course you can!” (106)<sup>(8)</sup>

「過去は繰り返せない」とするこの物語の語り手Nickの常識的な時間観に対して、Gatsbyは「過去が繰り返せないって!」と、Nickの発言が信じられないといわんばかりに叫んでいる。ここでの“cried incredulously”という表現は注目すべきである。なぜなら、この反射的な反応は、Gatsbyのなかで「過去は繰り返せる」ということが、あらかじめ信念にまで昇華されていないと出てこない種類のものだからである。このやりとりの前に、Gatsbyは、物理的な時間の座標軸を精神的超越でねじ曲げてしまおうとする試み、いい換えれば、自分の能力を無限なる神の能力にまで超越させる作業を完了させていたと考えるのが自然であろう。またそう考えると、Nickが直感的にGatsbyを評して、「ロマンティックな心構えがいちはやくできている」(8)としているのも頷ける。

加えて、新興成金GatsbyのDaisyを取り戻そうとする試みは、物語進行時のDaisyが伝統的富裕階級に属するTom Buchananの妻になってしまっていることで、富の階級闘争という二次の意味も孕んでくる。*The Great Gatsby*が、階級社会の歪みを糾弾したTheodore Dreiserの*An American Tragedy*と同じ1925年に発表されていることを考慮すると、Gatsbyの時代には、すでに階級制度が、個人の力では乗り越えられない障壁となってしっかりと根付いていたことは明白である。この意味からも、堅固な階級の壁を飛び越えようとするGatsbyの試みは、自

己の能力を神の域にまで超越させる、強烈な自己信頼なしには成立しなかったといえよう。

では、その作業はどのような過程を経てなされたのであろうか。Gatsby が新興成金であるということは、Tom のように財産を相続できたわけではないことを意味する。すなわち、Gatsby は、富という問題に限定していえば「無」からの出発を余儀なくされ、そこから「有」を生み出さなければならなかったわけであり、当然その行動の過程においては、常識を越えた緊張とエネルギーを要求されたはずである。しかし、Richard Lehan は、「Gatsby にとって、願望することは、皮肉にも所有することよりも重要だった<sup>(9)</sup>」とし、自己の意志を最優先させ、苦しい現状を変えていこうと望む動的な生き方が、Gatsby にとって半ば本能的であったことを指摘している。つまり、「自己の性質に従っていることのみが正しく、その性質に忠実に行動せよ」とする Emerson の自己信頼は、貧しさからの脱出という上昇志向を、自己の内面に強く宿していた Gatsby にとっては、生まれながらにどうしても必要な概念であったのである。この意味において、Gatsby の自己信頼には、富に関する「無」という必然性があったといえよう。Nick は、このような Gatsby を以下の如く評している。

If personality is an unbroken series of successful gestures, then there was something gorgeous about him, some heightened sensitivity to the promises of life, as if he were related to one of those intricate machines that register earthquakes ten thousand miles away. This responsiveness had nothing to do with that flabby impressionability which is dignified under the name of the 'creative temperament' — it was an extraordinary gift for hope, a romantic readiness such as I have never found in any other person and which it is not likely I shall ever find again. (8)

「周囲に何か華麗なものが漂い、人生において見込みのありそうなものには敏感に反応する」Gatsby は、「希望というものに対する並外れた才能に富んでいる」と表現されている。しかし、彼が新しい見込みや希望に敏感なもの、いい換えれば現在「ある」ことよりも将来「なる」ことを常に念頭に置く<sup>(10)</sup>のも、彼が富に関する「無」という現状に満足していないからであろう。その日記や伝記から判断すると、Emerson は劣等感に悩む陰気な男で、人生を否定的に眺めていた<sup>(11)</sup>。その Emerson が、自分に満足していなかったからこそ逆説的に自己信頼を全面に打ち出し、自己の弱さを消し去ろうとしたことと、上記の Gatsby の現状への不満ゆえにロマンティックな心構えを確立させていたこととの間には、超越主義を生む根元的な力という点において類似性を感じとることができる。

それでは、Gatsby は、彼に宿命的に求められた Emerson 的自己信頼を土台に、いついかにして、どのような自己を創造したのであろうか。それを解明するために、Gatsby の少年時代の生活ぶりから検証していく。最終章で、Gatsby の葬式に参列するために姿を現わした父親

Henry C.Gats は、亡き息子の在りし日を偲び、Gatsby の愛読書であった少年向け開拓者物語 *Hopalong Cassidy* を Nick に見せている。その巻末の見返しに「1906年9月12日」と日付が記されていることから、Gatsby が31~32歳くらい (49) であった1922年の夏 (9) の現時点から16年前、つまり Gatsby が15~16歳頃読んだ本であることがわかる。その見返しに記されていた“SCHEDULE”と“GENERAL RESOLVES”と題する書き込み (164) に注目してみる。

#### SCHEDULE

Rise from bed .....	6.00	AM.
Dumbbell exercise and wall-scaling .....	6.15-6.30	〃
Study electricity, etc. ....	7.15-8.15	〃
Work .....	8.30-4.30	PM.
Baseball and sports .....	4.30-5.00	〃
Practice elocution, poise and how to attain it .....	5.00-6.00	〃
Study needed inventions .....	7.00-9.00	〃

#### GENERAL RESOLVES

No wasting time at Shafter's or [a name, indecipherable]  
 No more smoking or chewing  
 Bath every other day  
 Read one improving book or magazine per week  
 Save \$5.00 [crossed out] \$3.00 per week  
 Be better to parents

規則正しく規律に厳しい生活指針である。ここには、明らかにピューリタンの精神が息づいている。しかし、この昔の愛読書を Gatsby が実家に置き去ったという事実、加えてその直後の変身ぶりから、彼がこの生活指針に代表される行動規範の一部を捨て去ったことが伝わってくる。Gatsby の変身は、17歳のとき、まさに「無」から「有」を生み出し、独力で立身出世した男 Dan Cody に出会ったときになされる。Cody のヨットがスペリオール湖の平瀬に錨を投じたとき、「初めて出世の兆しを目撃した」(94) Gatsby は、即座に Cody に師事し、成り上がるための「世にも不思議な教育」(97) を受けていく。すなわち、一つ一つ努力を積み上げていく勤労勤勉の精神の代りに、自己の能力を神の位置にまで超越させる Emerson 的自己信頼を、自らの行動規範の中心に据え、それによって、独力で成功の夢を追っていかうとする自己を創造したのである。語り手 Nick はこの Gatsby の自己創造を次のように語っている。

His parents were shiftless and unsuccessful farm people — his imagination had never really accepted them as his parents at all. The truth was that Jay Gatsby of West Egg, Long Island, sprang from his Platonic conception of himself. He was a son of God — a phrase which, if it means anything, means just that — and he must be about His Father's business, the service of a vast, vulgar, and meretricious beauty. So he invented just the sort of Jay Gatsby that a seventeen-year old boy would be likely to invent, and to this conception he was faithful to the end. (95)

「彼は17歳の青年が創り出しそうな Jay Gatsby という人物を創りあげ、この概念に最後まで忠実であった」と明言しているように、このときの自己創造が、Gatsby の一生をとおしての拠所になったことは間違いない。そしてその自己創造は、貧しい農民であった両親の生き方を決して受け入れない Gatsby にとって、生きていくには必要不可欠のものであった。ゆえに、彼は、プラトンの概念から、有限なる自身を無限なる「神の子」に仕立て上げたのである。よって、「個人の肉体として現れている神こそ、社会生活における完璧な法則である」とした、Emerson 哲学の真の実践者が、Gatsby であったともいえよう。そして、その「神の子」が奉仕すべきものは、「おびただしい世俗のけばけばしい美」であった。この「世俗の美」とは、作品のコンテクストのなかでは money に象徴される富に他ならない<sup>98</sup>。つまり、Gatsby は、自らの才覚だけを信じて富を蓄積し成り上がっていくことが、自己信頼を実現していく道だと考えた。そしてその考えが、いかに Emerson のいう「自己の性質に忠実に従った」ものであったかは、両親から授かった名前 James Gats (94) を捨て去り、自ら Jay Gatsby と名のつたことに象徴されているよう。

それでも、Gatsby の夢はいまだ漠然としたままであった。その夢が具現化するのには、物語の進行時から5年前、つまり Gatsby が26～27歳くらいのとき、Daisy という金持ちの女性に出会い、彼女を自分の富のすべてを費やしても獲得するに足る存在にまで神格化したときである。

His heart beat faster as Daisy's white face came up to his own. He knew that when he kissed this girl, and forever wed his unutterable visions to her perishable breath, his mind would never romp again like the mind of God. So he waited, listening for a moment longer to the tuning-fork that had been struck upon a star. Then he kissed her. At this lips' touch she blossomed for him like a flower and the incarnation was complete. (107)

「それから彼女に接吻した。彼の唇が触れると、彼女は彼のために花のように咲いてくれ、彼の夢の顕現は完璧だった」とあるように、Gatsby の成功の夢は、Daisy という一個の人間の姿へと具現化していく。Gatsby は、自らを「神の子」に超越するにとどまらず、恋人 Daisy ま

でも「神の子 Gatsby」が愛するにふさわしい位置にまで超越させたのである。<sup>07</sup>つまり、Gatsby のなかの Daisy は、彼の形而上学によって創造した彼の分身であり、自己のみならず自己の分身をも創造したとき、自らが一気に無限の能力を有する神の位置にまで飛翔する Emerson の超越主義、とりわけその中心概念である自己信頼を実現していく、真の自己創造を完成させたといえよう。実際このあと、一度 Daisy を失った Gatsby は、Daisy を取り戻すべく本格的に「世俗の美」への奉仕を開始し、富を蓄積していく。Gatsby は、富の追求という物理的な夢を、自らの観念が創り出した、Daisy なる等身大より大きい女性を再獲得するという精神的な夢に移し変えたのである。<sup>08</sup>

### 3. Gatsby の自己信頼の崩壊

このような Emerson 的自己信頼を行動規範とした Gatsby の夢、すなわち、「過去」を取り戻し、それを自身の「将来」につなごうとする大いなる夢は、Tom に代表される伝統的富裕階級の力の前に碎け散る。John Peale Bishop もこのことを、「Gatsby は Emerson 的超越主義を完成させた男に見えたが、最終的にはそれは失敗に終わっている」<sup>09</sup>と表現している。それでは、なぜ Gatsby の試みは失敗せざるを得なかったのであろうか。彼の試みに失敗の必然性があったと仮定して、この根元的問題を考えてみると、Emerson が自己信頼を実社会で貫き通すうえで重要な概念であると主張した、「個と社会との均衡」が Gatsby に欠落していた点が浮かびあがってくる。作品にそって具体的に検証してみよう。

Nick の家で Daisy に5年ぶりに再会した Gatsby は、有頂天になり自分の豪邸に Nick と Daisy を招く。過去に自分の貧しさゆえに Daisy を失った Gatsby にとって、現在の自分の富を誇ることで Daisy の気を魅こうとする行為は、Gatsby ならずとも思いつく当然の策である。ここで問題となるのは、いくら自分が再会の至福のなかにいるといっても、二人の再会の手筈を整えることをこころよく承諾し、自分の念願をかなえてくれた Nick の存在、いわば人と人の関わりが自分にもたらしてくれる恩恵の存在を、簡単に忘れてしまう Gatsby の社会性の欠落である。そのときの様子を、“Daisy glanced up and held out her hand; Gatsby didn't know me now at all.” (93) と Nick は表現している。同じように再会の喜びのなかにいた Daisy が、我に帰って Nick に手をさし出したのと対照的に、Gatsby の頭のなかではすでに Nick の存在は抹消されている。このような何気ない無意識の動作にこそ人間の本質が現れることを、我々は経験によって知っている。そして、ここでの無意識の動作の記述は、作者が登場人物を描くうえでの技法として意識的に使用していると考えられ、この場面は、ひとつのセンテンスのなかで、ことさら二人のとった行動の違いを強調するという技法により、Gatsby の、ひとつのことに没頭すると周囲が見えなくなる性向を的確に捉えている。Kenneth Eble の言葉を借りていえば、“magic suggestiveness”<sup>09</sup> 存在しているともいえよう。The Great Gatsby においては、

各章の終わりに必ず暗示的な文章が挿入されているが、上記のセンテンスは、第5章の最後の短いパラグラフに含まれている。このことから、作者の、暗示的効果をあげようとする強い意図を感じることができる。こうした Gatsby の性向の表出は、彼が Tom に対して “Your wife doesn’t love you. …She loves me.” と敢然と戦いを挑んだブラザ・ホテルの一室で頂点に達する。Daisy も一度は “I never loved him” といって Gatsby にしぶしぶ同意を示すが、彼の状況をわきまえない性急さにたまりかね、遂に “Oh, you want too much!” と叫ぶに至る (124-126)。このときも Gatsby は、Daisy を想う気持ちが嵩じて、周囲の人間の立場を考慮する余裕をもてないでいる。そして、このような社会性の欠落は、Daisy の気持ちを Gatsby から離れさせ、Gatsby の自己信頼が崩壊の一途をたどっていくきっかけとなってしまうのである。また、「現実こそ非現実なのだとほのめかして満足を与える彼の夢想」(95) が、Gatsby が現実社会という全体から遊離する傾向に拍車をかける。さらに Fitzgerald の処女長編 *This Side of Paradise* (1920) にも、「階級を越えようとする、ますます社会と対立するようになる<sup>(2)</sup>」とあるように、Gatsby の試みの結果を暗示するようなくだりが見受けられる。このような作品からの証拠に加えて、R.W.Stallman は、「Gatsby の世界は過去と未来にねじ曲げられていて、その間の時 [= 現在] は時間の落とし穴に落ち込んでいる<sup>(3)</sup>」としている。つまり、人々が実際の生活を営む現在に対する Gatsby の知覚の欠落に言及し、Gatsby の現実社会から逸脱してしまう傾向を指摘しているのである。

以上、作品からの例証と批評を総括すると、Gatsby には Emerson の「個と社会との均衡」という概念が欠落しており、そのことが Gatsby の社会からの孤立を招き、彼の超越主義的行動が完了間際で失速した原因となったという説に帰納的に辿り着く。しかし、Gatsby の自己信頼の崩壊は、単に Gatsby 個人の問題だけに帰してしまえないであろう。なぜなら、これまで「個と全体の均衡」を論じてきたのであるが、時代という全体への考察がまだまだ十分に果たされていないからである。よって、以下に考察を加えていくが、そのまえにまず Gatsby の 1920年代への分析を試みる。

*The Great Gatsby* の舞台となった 1920年代のアメリカは、経済的には第一次世界大戦後の未曾有の好景気のさなかにあり、人々はライフスタイルを大きく変えつつあった。自動車の普及や映画・プロスポーツの発達、加えて若い人たちのあいだでは、ショート・スカートやボブヘアに代表される享楽主義的女性 (flapper) の出現、深夜パーティー、禁酒法下での飲酒などにより、既成道徳に反抗する一種の風俗革命が起こっていた。当時流行し人々が踊り狂ったチャールストンのリズムを象徴的に捉えて、この時代を Jazz Age と名づけたのは Fitzgerald 自身である。今日アメリカ的という言葉聞いたとき、一般的に連想される多くのものがこの時代に生まれた。さらに、科学的な懐疑主義、ことにフロイトの学説が一般に広まったことで、保守的な道学者の教義はしだいに勢力を失い、ヴィクトリア朝式とかピューリタンのという言葉は非難のもとになりつつあった。つまり、Gatsby の 1920年代は、表面的には Emerson



が自身の思想を確立した1830年代と同じく、人々が自己のなかの無限な力を信頼し得る土壌と革新的な雰囲気が漂っていたのである。しかし、1890年の国勢調査は、すでにフロンティアの消滅を告げており、1920年代の繁栄の何割かは、ウォール街の実体を欠いたマネーゲームが支えていたに過ぎなかったことも事実である。こうした時代の雰囲気的一端は、Nick の、「東部へ行って債券の勉強をすることにした。僕の知っている人は誰でも債券の勉強をしていたから、この仕事だったら独身者をもう一人くらい雇ってくれるだろうと想像した」(9) という語りからも窺い知ることができる。経済を支える産業が空洞化していたのである。そのことを明確に示すために、ここに1929年のニューヨーク市場の株価暴落の値を記してみる。

	High price Sept.3, 1929	Low price Sept.13, 1929
American Can .....	181 <sup>7/8</sup>	86
American Telephone & Telegraph ....	304	197 <sup>1/4</sup>
General Motors .....	72 <sup>3/4</sup>	36
United States Steel .....	261 <sup>3/4</sup>	150
Westinghouse E & M .....	289 <sup>7/8</sup>	102 <sup>5/8</sup>

軒並み半値近くもしくはそれ以上の暴落であり、この暴落の幅が基盤の弱いバブル経済の、ひいては1920年代という時代の幻想の大きさだったとする解釈も成り立つ。つまり、これほどに現実から遊離した経済であり時代だったのである。このような状況下、Hopalong Cassidyの見返しの書き込みに代表される、勤勉さと質素な生活と信心とが成功によって報いられるという哲学は、埃をかぶってしまった<sup>83</sup>。Emersonの自己信頼も、その書き込みに見られるような、努力を積み重ねていく性質のものではなく、人間を一気に神の位置にまで引き上げてしまおうとする超越思想を土台にしているが、Emersonの時代には、その上昇志向に釣り合うだけの、フロンティアという確かな実体に支えられた経済基盤があった。だからこそ、Emersonの自己信頼は、思想を支えてくれる時代あるいは社会を信ずることができ、その社会と個である自分との均衡をうまくとり得たといえる。一方、Gatsbyの自己信頼は、時間や階級に対する常識を一気に超越しようという精神こそ、根底でEmersonの自己信頼に通じるものでも、それを支える社会が株価暴落が示すような幻想の世界であったとすれば、「個と社会との均衡」などとりようがなかった。ゆえに、GatsbyがEmersonの時代と同じように全体への信頼を樂觀できず孤立していったのは、彼が生きた時代を考慮すれば当然であるともいえよう。Stallmanも、Gatsbyの現実からの超越を、“Gatsby transcends reality and time. His confused time-world results from the confused morality of the epoch he inhabits, The Age of Confusion.”<sup>84</sup>と表現し、時代との密接な関連性を強調している。

次に、Emerson の自己信頼と Gatsby のそれとを、作品に、より密着した形で比較してみる。The Great Gatsby という作品のなかで、Emerson の自己信頼を体現しているのは、17歳の Gatsby が師事した Dan Cody であろう。語り手 Nick は、この Cody のことを、「ネバダ銀鉱地、ユーコンのラッシュ、75年以後のあらゆるラッシュでものになった男だ」(96) と説明している。一応、晩年とはいえ Emerson の生きた時代に符合し、何より、個人の野心とラッシュに象徴される社会全体の上昇志向とがピタリ一致し均衡がとれている点で、Emerson 的自己信頼の体現者といえよう。それに比べて Gatsby は、Dan Cody に自分と近いものを感じ彼に師事するが、自身の自己信頼を実現する場合は、作品のなかで「1919年のワールド・シリーズを買収した男」(71) とされる、Meyer Wolfsheim に代表される暗黒社会に見出さざるを得なかった。それは、Gatsby の時代には、Dan Cody 的、いい換えれば Emerson 的上昇志向の強い人間が、もはや入り込む余地がないほどの堅固な階級社会ができあがっていたという理由による。精神的には Emersonに通じる自己信頼を有していた Gatsby が、その精神を体現していた Dan Cody の世界ではなく、Meyer Wolfsheim の実体のあやふやな暗黒社会でしか勝負できなかったという作品構成そのものが、Gatsby の自己信頼の崩壊が運命的なものであったことを示している。

加えて、Emerson が自己信頼を阻害するものとして批判し、作品のなかでは、Tom に代表される富裕階級の富を継続的なものにするために是非必要だった分業制度と、自己信頼との関係を検証してみる。Emerson によれば、自己信頼を保持するためには、人間が潜在能力としてもっている、すべての職能をこなせる人間本来の姿を取り戻すことが必要であるとされている。そして、Emerson は、このような人間を大文字で始まる Man で表わしている。つまり、個を尊重しながらも個に埋没することなく、全体を見通せる人間像の重要性を説いているわけであり、ここには、「個と社会との均衡」を重要視した自己信頼の概念との共通性を見出すことが可能である。さらに、Emerson は、この大文字で始まる Man のような人間こそが、「彼を取り巻くすべての者を支えているに違いない」といつている。尾形敏彦『ウォルドー・エマソン』によれば、「このような考え方は、不動の精神をもつ個人が社会を建設するという開拓者の社会観と同じである」とされており、作品の登場人物でいえば Dan Cody、歴史上の人物でいえば、作品にも名前が出てくる James J. Hill や John D. Rockefeller といったセルフメイド・マンたちが、ここでいう Man に連なる人たちといえる。1830年代は、こういった独立独歩の人間が力を発揮できた時代であり、かつそういう人たちの力を必要とした時代であった。しかし、Gatsby の1920年代は、技術革新によって生産量が増大し、加えて幻想が生み出した消費社会の需要を満たすために、一人一人の人間が社会全体というものの存在すら意識することなく、人間性を否定された個に徹すべき時代であった。そしてそこでは、個としての社会的役割に徹する分業制度が必要不可欠になっていた。分業制度はあくまで人間が確立したものであるが、それは科学の力による機械文明と手を携えて、もはや人間の手に負えない巨大な力、いわ

ゆるダイナモ<sup>89</sup>が支配する社会状況を創り出していたのである。Gatsby のなかに流れる Emerson 的自己信頼は、人間の素朴な力より機械と制度の創り出す力のほうが勝りつつあった 1920年代には、すでにリアリティーを失っていたともいえよう。そのことを物語るように、Gatsby の野望は、その機械文明と分業制度のうえに君臨し、自らは一滴の汗も流さない資本家 Tom の力の前に砕け散る形で終結している<sup>90</sup>。この Gatsby の夢の崩壊は、“‘Jay Gatsby’ had broken up like glass against Tom’s hard malice,” (141) と表現され、Jay Gatsby にはシングル・クォーターションがふられている。このシングル・クォーターションとフルネームの表記は、17歳の James Gats 少年が、「自己の性質に忠実に従う」Emerson 的自己信頼のもとに、成功の夢を追いかける自己を創造し、自ら Jay Gatsby と名のつたことを思い起こさせる。つまり、Tom の「固い敵意」のまえに砕け散ったのは、Jay Gatsby という Gatsby が創造した概念であった。よって、その後 Gatsby が射殺されたときには、すでに概念が消滅し精神が肉体から去ってしまったという、別言すれば自らの精神が否定した James Gats が、この世から抹殺されたに過ぎなかったといえるであろう。また、この Gatsby の射殺された時間が、キリストの死の時間午後3時に重ねられていることは、自らを無限な能力を有する神の位置にまで引き上げようとした Gatsby の自己信頼が、Emerson の自己信頼の背景にあったフロンティアという実体が消え去ってしまった1920年代のアメリカ社会においては、すでに不可能になってしまっているという、現実へのメタファーとも解釈できる。Fitzgerald が、‘Jay Gatsby’ という概念の死を通して描こうとしたものは、社会そのものが幻想のなかでプラグマティズムの欠落を招き、結果として信頼を失い、加えて個人の精神性も機械文明のなかに埋没し、物質主義一辺倒になってしまったアメリカ社会の不毛であろう。Gatsby の行動と Emerson の自己信頼を比較することによって、このことがより鮮明に浮かび上がってくる。

したがって、Gatsby の自己信頼の崩壊は、Gatsby 自身の性向も一因であったろうが、1920年代という全体そのものが、ある意味で幻想が捻出した好景気のなか、現実から遊離した時代であり、「個と社会との均衡」などとりようがなかったことに根本原因が存在したと解釈できよう。

## おわりに

Gatsby の敗北を、Emily Miller Budick は、「Gatsby は自己信頼の背理法（ある命題が不合理な結論になることを立証して、その命題が真でないことを示す）である<sup>91</sup>」と評している。この Budick の批評は、Emerson の自己信頼なる仮説が、フロンティアと産業革命により有効であった極めてまれな時代、すなわち1830年代という一時期を除いては無効であるという意味において正しい。しかし、一方で、Emerson の仮説はたとえ一時期とはいえ、アメリカとアメリカ人に勇気を与え、新しいアメリカを建設していく過程において拠所となったことも紛れもな

い事実である。そして Emerson の自己信頼を土台としたアメリカの夢は、地理的なフロンティアが消滅した以後も、アメリカ人の心にフロンティア・スピリットとして残った。そのフロンティアの名残りを、一見1830年代と同じようなロマンティックな精神風土が支配的に見えた、1920年代の大都会ニューヨークにもち込んだのが Gatsby であった。しかし、1920年代は、精神的理想を追う夢が物質的な栄華を求める波に飲み込まれてしまっており、そのような時代に生きて時代そのものを体現しながら、一方の夢 [=精神的な夢] に命をかけたところに、Gatsby の悲劇があり、それは Gatsby の宿命でもあった。

それでは、Fitzgerald は、Gatsby の Emerson 的自己信頼を拠所にした夢の追求を完全に否定しているのだろうか。その問題に対する Fitzgerald の解答は、Gatsby 敗北後の語り手 Nick の言動が担っていよう。Nick は事件の顛末を語り終えた後、故郷中西部へ帰還している。そこはかつてフロンティアが存在した場所であり、Emerson が自己信頼の概念を創造するにあたって、地理的な実体を与えてくれた、無限の可能性を内包しているかのように思えた、豊かな緑あふれる自然が存在した場所である。Gatsby との戦いに勝利した Tom のような有閑階級が支配する都市を後にして、Nick がそこへ帰っていくということは、職能が分業化されて人間性を見失った社会全体に対する無言の反抗を意味すると解釈できよう。Nick が、「結局 Gatsby はあれでよかったのだ … 僕が一時 [Gatsby の物語を語ることに] 興味を失ったのも、Gatsby を喰いものにしたものに嫌気がさしたからだ。彼が抱いていた夢の航跡に、汚い埃が舞いあがったからなのだ」(8) というときの「汚い埃」とは、明らかに Tom に代表される富裕階級の間人たちである。このことから、最終的に Nick は、敗者 Gatsby に共感を示し、Tom を含めた富裕階級を否定していることが窺い知れる。すなわち、Fitzgerald は、Nick の語りを通して、自己信頼がもはや通用しにくくなり、逆に自己信頼を妨げるものとして戒められた分業が不可欠となった、産業社会の精神的荒廃というリアリスティックな面と、自己信頼が説得力をもち得た時代に対する懐古というロマンティックな面とを、同時に提示しているのである。

## 注

- (1) Emerson はこの気概と野心を、「アメリカの知的独立宣言」として有名な “American Scholar” のなかで力強く述べている。

Our day of dependence, our long apprenticeship to the learning of the other lands, draws to a close. The millions that around us are rushing into life, cannot always be fed on the sere remains of foreign harvests.

Ralph Waldo Emerson, “American Scholar” In *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, 2nd ed., vol. 1 (New York: AMS Press, 1979), pp.81-82.

- (2) Ralph Waldo Emerson, “Self-Reliance,” In *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, 2nd ed., Vol.2 (New York: AMS Press, 1979), pp.50-51.

- (3) Ralph Waldo Emerson, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson*, vol.7, Eds.

Gilman, Ferguson, Clark and Davis (Cambridge, Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1964) .

- (4) Emerson, "Self-Reliance" (*op.cit.*) , pp.53-54.
- (5) Morris R.Cohen は、19世紀後半ニュー・イングランドに生まれ、観念を実際の行動に結びつけて考えるプラグマティズムを評して、「故郷を捨ててアメリカに移住し、自らの環境を切り開いていった人々の考え方が明白に反映されている点にある」といつている。Morris R.Cohen, *American Thought: A Critical Sketch* (Illinois: Free Press, 1954) , p.20.  
また R.B.Perry は、個人主義を排他的 (exclusive) なものと包括的 (inclusive) なものに区別し、exclusive な個人主義はいわゆる利己主義であり、inclusive な個人主義は他人を認め数々の個性を尊重し、他人の権利を認めることからくるさまざまな形の社会的交わりを受け入れるものとした。この Perry のいう包括的個人主義は、心理学者 William James のプラグマティズムを分かり易く代弁したものであることを考え合わせると、プラグマティズムと Emerson のいう個と全体の調和との距離は思いのほか近い。cf. R.B. Perry, *In the Spirit of William James* (Bloomington: Indiana University Press, 1958) .
- (6) Cf. 大橋健三郎「フロンティアとアメリカ精神」『講座アメリカ文化2, フロンティアの意味』所収 (南雲堂, 1969) .
- (7) *The Great Gatsby* という作品における時間観については、福屋利信 (共著)「*The Great Gatsby* における時間」(山口大学教育学部「研究論叢」第46巻第1部, 1996) を参照。
- (8) 以下括弧内の数字は、F.Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, Introduction and Notes by Tony Tanner (Harmondsworth: Penguin, 1990) の頁数を示す。
- (9) Richard Lehan, "The Road to West Egg" In *The Great Gatsby: The Limits of Wonder* (Boston: Twayne, 1990) , p.30.
- (10) Richard Lehan, "Inventing Gatsby," In *The Great Gatsby: The Limits of Wonder* (Boston: Twayne, 1990) , p.62.
- (11) 尾形敏彦『ウォルドー・エマスン』(あぼろん社, 1991) , p.170.
- (12) Emerson は「報償論」で、「我々の強さは弱さから生まれてくる」といつている。  
Ralph Waldo Emerson "Compensation" In *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson* 2nd ed., vol.2 (New York: AMS Press, 1979) , p.117.
- (13) Emerson の自己信頼は、共通の自己、つまり「同一性」という原因があつて、それによる自己創造は結果であり、「多様性」をもつていい。cf. 尾形(*op. cit.*) , p.180.
- (14) *Hopalong Cassidy* の実際の発刊は1910年である。よつて、この日付は現実には不可能である。この食い違いには、事実をまげても、Gatsby が15-6歳のときこの書き込みをしたという設定にしたかつた、作者 Fitzgerald の意図が働いていてと考えられる。
- (15) Emerson, *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson* Vol.5, (*op. cit.*) , p.126.
- (16) *The Great Gatsby* という作品のなかの金銭観については、福屋利信「*The Great Gatsby* における money」(山口大学英語教育研究会, YASEELE, 第1号, 1997) を参照。
- (17) Fitzgerald の描く主人公たちに共通の、この自己陶醉的傾向は、彼の処女長編小説 *This Side of Paradise* において、すでにその萌芽が見て取れる。主人公 Amory は、水面に映る自らの姿に心を奪われて溺死した、ギリシャ神話の Narcissus に喩えられている。cf. F.Scott Fitzgerald, *This Side of Paradise* (New York: The Modern Library, 1996) .
- (18) Gatsby は、Daisy に求愛する資格を得るために富を蓄積したのであつて、決して直接に富の力で Daisy を獲得しようとしたのではない。そしてこのことが、Platonic な恋愛に金の匂いをしみ込ませるというタブーを犯しながらも、*The Great Gatsby* がシリアスな小説としての位置を保っている

要因のひとつとなつていよう。

- (19) Kermit W.Moyer, "The Great Gatsby: Fitzgerald's Meditation on American History" In *F.Scott Fitzgerald*, ed. Arthur Mizener (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, 1963), p.43.
- (20) Cf. Kenneth Eble, "The Structure of *The Great Gatsby*," In *F.Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*, ed. Harold Bloom, Modern Critical Interpretations Series (New York: Chelsea House, 1986), p.8.
- (21) Fitzgerald, *This Side of Paradise* (*op. cit.*), p.120.
- (22) R.W.Stallman, "Gatsby and the Hole in Time" In *Major Literary Characters: Gatsby*, ed. Harold Bloom (New York, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1991), p.58.
- (23) 以上をまとめるにあたり、次のものをはじめとする諸文献を参照した。  
F.Scott Fitzgerald, "Echoes of the Jazz Age" In *The Crack-Up with Other Pieces and Stories* (Harmondsworth: Penguin, 1965), Richard Lehan, "Historical Context" In *The Great Gatsby: The Limits of Wonder* (Boston: Twayne, 1990), Marius Bewley, "Scott Fitzgerald and the Collapse of the American Dream" In *Modern Critical Views: F.Scott Fitzgerald*, ed. and Introduction by Harold Bloom (New York: Chelsea House Publishers, 1964), Frederick Lewis Allen, *Only Yesterday*, (New York: Harper & Row, Publishers, 1985), Richard B.Morris, *Encyclopedia of American History* (New York: Harper & Row, Publishers, 1965).
- (24) Stallman, "Gatsby and the Hole in Time," (*op. cit.*), p.56.
- (25) Emerson の生涯が1803年から1882年であることを考えると、1875年は Emerson の晩年にあたる。
- (26) Cf. Emerson "American Scholar" (*op. cit.*), pp.82-84.
- (27) Emerson, 'Self-Reliance' (*op. cit.*), p.89.
- (28) 尾形 (*op. cit.*), p.186.
- (29) Cf. Henry Adams, *The Education of Henry Adams* (Boston: Houghton Mifflin, 1946).
- (30) Richard Lehan は、機械文明によって栄える当時のニューヨークと Tom の支配する世界を関係づけて、次のように述べている。

The machine separated man from nature, transformed the landscape, helped create the modern city, and enlarged the scale on which man lived as life become "less and ever less human." In a phrase, the machine created the world of Tom Buchanan. (Lehan, p.88).

- (31) Emily Miller Budick, "Gatsby and Emerson," In *Major Literary Characters Gatsby*, ed. Harold Bloom (New York, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1991), p.162. "He [Gatsby] is the *reductio ad absurdum* of self-reliance, ..."
- (32) 岡本紀元 「ジャズ・エイジと「アメリカの夢」の崩壊」『文学とアメリカの夢』所収 (英宝社, 1997), pp.193-194.
- (33) 現実の地理的フロンティアはすでに消滅していても、Gatsby そして Nick の心のなかで、精神的フロンティアは存在しつづけていた。その存在はまた、アメリカ人一般にも精神的拠所としてあてはまるものであり、ゆえに、懐古にもつながるのであろう。それを裏づけるような記述が、Emerson の思想の影響を受けた Henry David Thoreau の「歩く」と題されたエッセイに見られる。「東の方にはただむりやり出かけていくのだが、西のほうへは自由に赴くのだ...何かこれに似たことが同国人たちの支配的傾向となっているのでなければ、私はこの事実をこんなに強調したりはしないだろう」と Thoreau はいつている。この発言が、マサチューセッツ州コンコードに住み着き、生涯西部に赴くことのなかった Thoreau の観念の所産であることで、自己信頼を背後で支えていた精神的フロンティアの存在に対する意識が、如何にアメリカ人の心に根強く定着していたかを示していよう。そして、それが精神的なもののゆえに、時代を経ても色褪せることなく、現代のアメリカにも継承されているのではあるまいか。もちろん、それは Nick の西部帰還の場合と同じく控え目な主張

であろうが、アメリカ人の心の底に脈々と息づいている感情であろう。Fitzgerald は、Gatsby の自己信頼を、時代に押し流されるかたちで失敗に終わらせているが、その精神には共感し、自己信頼の普遍性を Nick に暗示させる形で物語を結んでいるのである。

Cf. Henry David Thoreau, "Walking" In *Walden and Other Writings*, ed. Brooks Atkinson (New York: The Modern Library, 1992) , p.638.

(ふくや としのぶ 文学研究科英米文学専攻博士後期課程) 1997年10月16日受理

